

多義語と隠喩

西 尾 寅 弥

一

単語には、二つ以上の意味をもっているもの、すなわち多義語であるものがたくさんあるということは、いうまでもないことである。多義語は、どの言語にも、広く普遍的に存在するものだとみられる。もっとも、「一つの意味」とは何であるか、その具体的な認定の基準は何かという基本問題がはなはだ難問であって、ある語が多義語かどうかも自明ではないことが多いので、常識的な判断にたよって、一応処理するほかはない点もあることは、現段階では避けられないことであろう。

一つ一つの意味に対して、それぞれ別の語形が対応する、すなわち、意味と形が一对一に対応する状態を仮定してみると、表わすべきばう大な数の意味と同じ数の語、語形が必要なことになる。あいまいさのない代償として、あまりに多い語数を語彙がもたねばならないという重荷を負うことになる。ところが、現実には、多義語がたくさん存在することによって、語数のふえることがある程度緩和され、一種の経済性もたらされている。多義性によるあいまいさも、じっさいの言語活動においては、文脈や場面の働きによって、どれか一つの意味に限定されることが多いので、そのために伝達の障害をおこすことは、あまり多くはないとみられる。

右の点に関連して、ポール・リクールは次のように述べている。

意味論的に両立可能な語義を、このように相互に選抜しあうのは、ほとんどの場合、きわめて静かにおこなわれるため、与えられた文脈では、他の不適当な語義は、念頭に浮びさえしない。ブレアルがすでに指摘したように、「語の他の意味を、わざわざ消滅させるにはおよばない。それらの意味は、われわれにとって存在せず、われわれの識閥に入っていないのである。」

（『生きた隠喩』久米博訳 現代岩波選書 九二頁）

右の趣旨を、「打つ」という動詞を一つの具体例として考えてみよう。たとえば、「庭に水を打った」という発言をしたり、聞いたりするときに、「釘をうつ」とか、「ピストルをうつ」などというときの「うつ」の意味は、念頭にうかぶものではなく、意識の範囲に入らないものである、ということであろう。

語の多義性に関して、『現代英語学辞典』（一九七三 成美堂）の“Polyseny”の項の中に、次のように述べられている。

多くの言葉は多義であるが、それらが実際の発話に用いられたいには、つうれい、ある一つの意味だけが前面におし出されて、残りの意味は後退する。（中略）

しかし、がんらい、多義である言葉が実際の発話に用いられる場合に、ただ一つの意味に落ち着いてしまうとはかぎらない。残りの意味はすっかり解消してしまうというよりは、背後にあって、前面の意味をささえ、あるいはこれを牽制していると

みられる。

多義性のもつ、右のような側面も、無視することのできない性質である。

多義語における複数の意味は、お互の間に何らかのつながりをもっていて、そのために一語としてのまとまりを保っていると考えられる。そのつながりが切れてしまえば、もはや同音異義語の関係に化することになる。「話す」が「放す、離す」と同源だとする語原説が正しいとすれば、この一例になる。）ところが、意味上の「つながり」も、それがあるかないかについて、人々の意識において、一致しやすいものもある一方では、意見の分れてしまうものもある。また、つながりがあるといっても、いろいろな程度があつて、つながりがないばかりとの境界に一線を引くことのむずかしい、連続的な性質のものであろう。多義語のこのような面について積極的に考察したものは、まだ見当たらないように思われる。

小論では、語の意味における基本的なものが、隠喩のはたらきによって、転義を生じ、その結果としてもたらされている多義性について、現代日本語の中の若干の例（大部分は動詞）によって考えてみようとしている。

「比喩」のはたらきというものは、言語表現において非常に基本的なものであり、また、情性をやぶる創造的な面にも大きい役割を果たしている。多義語における、意味の相互間のつながりにおいても、比喩によって生じた関係というものが、おどろくほど多いようである。

多義語のなかには、意味の数がたくさんあつて、比喩の関係でむすばれているものが一つが多義語の中にいくつも指摘できるようなものもある。しかし、小論では、もとになる一つの意味と、それから比喩によって生じた転義という、二者の関係だけに注目すること限定して、問題を単純化しよう。比喩による転義の問題は、基本的には、ある意味と、その転義という、二者の間の関係にほかなら

ないと考えるからである。

二

「比喩」は、もとは修辞上の表現技法の重要なものとして考えられ、直喩、隠喩、諷喩、提喩、換喩、などの類があげられている。文体研究の方面では、比喩には作家の個性のあらわれやすいことが注目されている。比喩は、単語の意味の上の問題とも深いかわりをもっている。たとえば、「花がほころびる」「花がわらう」という表現は、もとは、花の開くようすを、衣服のぬい目の少しほどこけること、人間の顔の笑うときのうごきにたとえた隠喩であつた。ところが、これらがくりかえし使われ、慣用化してきて、国語辞典にも、「ほころびる」の意味の一つとして「つぼみがひらく」（三省堂国語辞典）などと登録されるようになった。このように、単語の意味として定着し、語彙のシステムの中に組み込まれた隠喩は、いわゆる「死んだ隠喩」であつて、新しい意味の創造である「生きた隠喩」と対比させられる。

「生きた隠喩」とは「死んだ隠喩」に対して言う。後者は、慣用化され、濫用されて、語彙化し、多義性の一つとして辞書に登録されるようになったものである。それに対し、生きた隠喩とは、まだ語彙化されず、あるいは脱語彙化して、異例の属性賦与によって意味を創造する、述語作用の所産である。（ポール・リクール著 久米博訳『生きた隠喩』の訳者あとがき）

は、そういう見方を、はつきりと述べている。しかし、「生きた隠喩」と「死んだ隠喩」は、ことがらの両極であつて、その中間にはいろいろな程度があり、両者は連続的だとも言えるのではなからうか。ひるがえって、「多義語」というものの内部の構造をみると、基本的・中心的な、具体性のつよい意味と、それと隠喩の関係で結びついているとみられる意味とが共存していることが、おどろくほど多いように思われる。たとえば、「はびこる」には、「雑草がはびこる」

のように草木が茂って広がる意味と、「悪がはびこる」のようによくないものが広がって勢力をもつ意味とが、隠喩の関係を保ちながら共存しているとみられるが、このような例は枚挙にいとまがない。

小論では、多義語の中に共存し、少なくとも発生的には隠喩のはたらきによって結びついている二つの意味が、現代語の普通の意識の中ではどのような関係で存在しているか、ということについて、わずかながら調べ、考えてみたい。「現代語の普通の意識」といっても、この問題のばあいには、一般性の高い、均一的なものがあるかどうかはわからないので、結局は筆者自身の意識を内省して述べる、ということになる。しかし、できれば少しでも一般化、客観化したいという希望はもっている。最近実施した小さい質問調査の結果を参考にしながら、自分の意識を整理してみることにした。小論の終りに、付録的に、調査用紙の内容をそのまま転載し、あわせて同じところにその単純な集計の結果を書き入れた。すなわち、二十二の各問の下方に、その問について①～⑥の六つの選択肢のそれぞれを採った人数の実数と、その全体の人数（五五名）に対するパーセント（カッコ内の数字）を書いてある。被験者は、短大国文科二年生の四七名を中心とする大妻女子大学の若い女性である。

いま、問題にしようとしているような、「二つの意味」のへだたりは、近い密接な関係であるものから、無関係になってしまっているものにまでわたって、いろいろな程度のもものがあって、連続的に推移しているのだろうと考えられる。関係の距離を測ることのできる方法は、現在、考え及んでいないので、おおまかにいくつかの段階を設けて、それぞれの段階にわずかな実例をあてて説明する、ということをして以下に試みるに止まる。

三の一

第一の段階は、一つの意味と、その意味の「比喻的用法」との関係と言ふべきものである。いわゆる「生きた隠喩」であって、「転義」

として固まっては、まったくいないものなので、「二つの意味」ということも文字どおりには言えないものである。たとえば、

トンネルの出口から白塗りの柵に片側を縫われた峠道が稲妻のように流れていた。（伊豆の踊子）

という例をみよう。道などがある方向に通じることを「走る」と表現することは慣用化しており、「走る」の意味の一つとして辞典にものせられている。しかし、それと似たような事態が「流れる」で表現されていることは、作者の独特な個性的なとらえ方のあらわれであらう。同じ作者による例であるが、

峠の婆さんに煽り立てられた空想がぼきんと折れるのを感じた。（伊豆の踊子）

において、「空想」という心のはたらきが、固い棒状のものであるかのように「ぼきんと折れる」と表現されているのは、「生きた隠喩」の一つの例だとみられる。

：中盤でマラドーナのパスを受けたブルチャガが、約四十メートルドリブルして持ち込み、ネット左サイドに突き刺した。

（朝日新聞 昭六一・六・三〇 一八面）

現役時代の釜本邦茂さんのシュートは時速一三〇キロはあった。それがカバーンという音と共にネットに突き刺さる。シュートを浴びたゴールキーパーが、右のてのひらを裂いてしまったことがあった。（同右 昭六一・七・一 天声人語）

右の二例は、サッカーについての記事の中で、直線状のものすごい速さのシュートを「つきさす」「つきささる」と表現しているもので、比喻性が強く感じられる。

三の二

第二の段階として、「準転義」と呼ばれるべき程度の段階を考えてみよう。隠喩の働きによって生じる意味が、ある程度くりかえして使われるようになり、「転義」として安定した地位を得ているとまで

は言えないけれども、「転義」に準じる程度のものにはなっているとみられるもの、という意味である。国語辞典への登録は、されていないか、あるいは少数の辞典にはされているという程度、ということとを一つの目安として考えよう。

たとえば、「充電（する）」が、

（見出し）ひろ子は充電中

（本文）夏には十作目の主演映画を撮る。今そのために充電中だ。

（朝日新聞 昭六一・六・一 夕刊 一三面）

のように使われるものを、この類の一例としてあげよう。テレビで、芸能界のタレントたちが、休暇をとって海外へ行くような話題の中でも聞いた記憶があり、話しことばとしても使われているとみられる。「充電」について、大部分の国語辞典は、

蓄電池に電気をいっぱいに入れること。（三省堂 国語辞典二版

昭四九）

のように、本来の意味だけを一つかかげているが、『三省堂国語辞典』は、第三版（昭五九）で、新たに、

○実力をたくわえること。

と加えている。この語釈は、ごく簡単なものではあるが、とにかく

「充電」の一つの意味として辞典に登録されたわけである。さらに、

『旺文社詳解国語辞典』（昭六〇）では、

②（比喩的に）人が後に備えて活力を蓄えること。「一年間の――期間」「アメリカに渡って――する」

と、より具体的に限定された語釈がかかげられている。では、「充電する」の本来の意味との関係は、どうであろうか。現在の日常生活の中で、バッテリーに電気をみたくすという行動は、一般的に広くみられる、身近なものになっているので、バッテリーを人間に見立てて、外から精神的な栄養になるものをたくさん入れて、内にエネルギーをたくわえることを「充電する」と表現するという隠喩の働き

は、かなり生きていると考えられる。

充電をしているつもりが漏電し

（朝日新聞 昭六一・六・二六 朝日せんにゅう）

という川柳は、そのことを裏書きしていると思われる。いわゆる「比喩的内部言語形式」¹⁾、あるいは林大氏の説かれた「媒介義」²⁾の性質は、この「充電する」のような例については、はっきりとあてはまるであろう。

三の三

第三、第四の段階として、隠喩によって生じた意味が、その語の一つの転義の地位を得ているばあいを考えることにする。二つのうちで、第三の段階は、比喩性がはっきりと存在するもの、第四の段階は、比喩性がうすれているもの、とする。

第三の段階の例としては、たとえば、「しぼる」についての、「人を自由に行動させないこと」という意味がある。

：時間に縛られ、金銭に縛られ、母性愛の信頼に縛られ、少しは名家南村家の名に縛られ、多くは、日本の残存的封建性に縛られている駒子自身が、（自由学校）

のように使われているばあいの意味で、それは、「物が動かないように、ひもやなわをまきつけてむすぶ」という即物的な基本義とは別に、一つの転義の位置を確立しているながら、しかもこの基本義と隠喩の関係でつながっているように感じられる。「なわで人をしぼる」という文型と並行して、「規則で自由をしぼる」という文型が成り立ち、道具・手段が「で」によって、対象が「ヲ」によって表現され、同じ格体制をとることも、意味のつながりを保つ上に有利な状況だとみられる。また、基本義の範囲内でも、「ひもで小包をしぼる」のような、「モノ」を対象とする用法ではなく、「なわで人をしぼる」のように「ヒト」を対象とする用法のほうが、転義への媒介として働きやすいと思われる。

次に、「衝突する」という語についてであるが、新聞に読者の寄せた感想文の冒頭に、次のように使われていた。

最近、どうも職場のなかで女性と衝突することが多くなったような気がしてならない。

(朝日新聞 昭六・六・二四 一二面 男から女へ「笑顔に期待」団体職員Q)

この「衝突する」というのは、ここまでを読んだ限りでは、「意見などが対立して争いになる」ことかと思われる。筆者はそのことを十分予想していて、続けて

といっても、別に意見の対立というのではない。オフィスの中で、物理的に体と体が衝突しそうになるのである。

とことわっているのが、多義のうちの、具象的な基本義のほうの意味で使われていることが、はっきりする。冒頭のセンテンスだけでは、「衝突する」のもつ二通りの意味が原因になって、文の意味も二通りであり得た。そして、もし「意見などの対立」のほうの意味であったとしても、「物理的にぶつかる」という意味と無関係なのではなくて、わりあいはっきりと、ある類似性、かような所のあるのが意識されることが多いのではなからうか。これも、比喩性のはっきり保たれている転義の一例とみられる。

次に、動詞ではなく形容詞の例であるが、「けわしい」の、「危険や困難が予想される」という意味は、「土地の傾斜が急であるようす」という基本義とかなり密接につながっていて、第三の段階に属するとみられる。ことに、質問調査の(19)番の

世界平和の前途はけわしい。

のように、「前途」という、将来の成り行きを道にたとえた名詞と結びつくような文脈では、

あの山ののぼり道はけわしい。

のような、具体的な「道」への類比もはたらくので、とりわけ比喩性がはっきりと生きているように感じられる。この質問に対する答

えの結果をみると、「㊸密接に関係」が五割を占め、「㊹別の意味ではない」も三割になって、比喩性が強く意識される傾向を示している。

三の四

次に、第四の段階の、「比喩性のうすれている転義」について考えてみよう。

まず、直前に問題にした「けわしい」という形容詞の、もう一つの別の転義を例にしよう。それは、質問調査の(20)番の、

地主の態度がけわしくなった。

という例文にみられる、「表情・態度などに怒りを含んでいってとげとげしい」という意味である。この意味は、地勢について言う「けわしい」の中心的・基本的な意味とのつながりを、あまりはっきりとは持っておらず、何となく多少のつながりは感じられる、という程度で、第四の段階に入れられる例であらう。質問調査の結果は、「㊸何となく多少のつながりは感じられる」という選択肢を、五割弱の人が選んだ。

次に、「かさねる」という動詞の、「同じことをくりかえす」という意味、

質問をかさねる 乾杯をかさねる

にみられるような意味は、

皿をかさねる セーターを重ねて着る

にみられるような、具体物を対象にする動作をあらわす意味を媒介とすることはあまりなく、かなり独立性を得た転義になっていると思われる。

また、「積む」という動詞にも、「同じことを度重ねていく」というような、似た意味がある。

修業をつむ 善根をつむ

のような使われ方がそれであるが、「かさねる」と比べると、やや似

てはいるが、違う点がある。

ごぶさたをかさねる 失敗をかさねる

などは「つむ」におきかえることはできない。

経験をかさねる 努力をかさねる

などは、「つむ」におきかえることはできるが、もちろん微妙なニュアンスの差が出てくる。その違いは、「かさねる」「つむ」の基本的な意味の違いが、比喩的に転用されたところにも現れているものとして理解できるとみられる。それは、「つむ」には「本」「積み木」などのような、ある程度以上の体積をもったもの、物体を上へのせていって、その結果として全体の形が高く大きくなるという、基本的な意味における特性が、転義においては、無形のものごとくわえられてよい結果になっていくという、抽象化された類似性になって生きているとみられる。次にあげるような、実際の文章の中の「つむ」の使用例は、そのことを示しているものと思われる。

その智徳を積まなければならぬ。(阿部次郎「人格主義」)

正確を期するためだけにそんな努力が積まれている。(中野重治

「むらぎも」)

「かさねる」の基本的な意味は、『ことばの意味2』(柴田武編)によれば、「平面をもつ、同じ形の、二つ以上のものの、全体を接触した状態にする」ことで、紙のようにうすい物でもよい。その転義においては、

失敗をかさねる 犯行をかさねる

のように、よくないことまで含めて、同じことをくりかえすことで、結果の面は含まれていない。「つむ」と「かさねる」の転義の違いは、それぞれの基本的な意味との関係において、はじめて十分に理解され、説明が可能になるものと思われる。「つむ」と「かさねる」の複合動詞である「つみかさねる」は、「失敗をつみかさねる」のようにくりかえしの強調と、「討議をつみかさねる」のようにプラス効果の結果と、両面の特徴をあわせもっているようである。()

三の五

第五の段階は、二つの意味が比喩的転用の関係にあることが、現在の普通の言語意識では(ほとんど)まったく感じられなくなっている類である。

ところで、「多義語」と「同音異義語」を区別する明確な基準はなく、両者は連続的であり、境界は定められないものである。区別の基準のなかで、いちばん本質的なものは、「意味の上で関連があれば多義語であり、なければ同音異義語である」ということである。意味の関連性のありなしは、その言語を母国語とする話し手の直観が重要なきめ手であるが、その「話し手の直観」にも個人差があり得るのでなかなかむずかしい。しかし、ここで言う第五の段階は、もはや「多義語」の範囲をぬけ出して、「同音異義語」と化しつつある、または、化してしまっている、とおよそ位置づけられるだろう。

その具体例として、まず「値段を安くする」意味の「まける」をあげよう。もとの「勝つ——負ける」という意味分野からは大きく離脱して、「売り買い」の世界の、売る立場の人間の行為をあらわし、買う立場の人間に対する利益の提供の意味合いが感じられる。りくつで言えば、相手に対する一種の譲歩であり、敗北の意味の「まける」とのつながりが皆無ではなからうが、じっさいの意識ではそういうことはないように思われる。「おまけ」という名詞が派生しており、また、「もう負かりません」などと使う「まかる」という可能動詞が派生していることも、敗北の意味の「まける」とのへだたりの大きさを感じさせる。

ほかに、「見物人などの人気を博する」意味の「うける」、「ぐちを言う」意味の「こぼす」なども、第五の段階に属する例のように感じられる。国語辞典ではこれらを基本義と同一の見出しのもとに収めているものが多いが、共時論の立場からは同音異義語として扱うものであろう。

右の段階づけは、筆者個人の意識を中心とした、主観性のつよいものであることを免れないが、同じものさしで質問調査の二二項目を判定すると、次のような結果になった。(4・3などは、右に述べてきた五段階のどれと判定したかを示す)

(19)	3	(10)	3	(1)	4
(20)	4	(11)	4	(2)	3
(21)	4	(12)	5	(3)	4
(22)	4	(13)	4	(4)	3
		(14)	3	(5)	4
		(15)	4	(6)	3
		(16)	4	(7)	4
		(17)	3	(8)	3
		(18)	2	(9)	4

四

以上において、隠喩の働きで生じた転義など(転義にまで至っていないもの、転義の位置を去ってしまったものを含む)が、もとの意味とどの程度のつながりを保っているか、ということについて、かりに一つの段階づけを試みた。

以下には、このようなつながりを弱めたり、保ったりする要因として、どういうものがあるのだろうか、ということについて、今までに考えてみた、わずかな二、三のことを述べておわることにする。まず、問題とする二つの意味が、いずれもよく使われる、すなわち使用頻度があまり低くなくて、じっさいに生きた存在であることは、つながりが保たれる上の必要条件であるだろう。転義のほうはさかんに使われていても、原義のほうがあまり使われなくなつて、その存在が弱まっているばあいがある。

たとえば、

帆が風をはらむ

矛盾をはらむ 問題をほらむ

のように使われる、「はらむ」の「いっばいに含む」という意味は、「妊娠する」という原義のほう在日常語では人間に使うことが忌避さ

れるために、隠喩による転用であることは意識されにくくなっている。

また、「うがつ」の原義である、「穴をあける」という意味は、文章語的な文体のレベルだけのものとなって、使用頻度が低いので、

よく世相をうがつている うがつた話

のような転義とのつながりも、非常に意識されにくいものになっていると思われる。

「しごく」という動詞は、現在では「むごいほどにきびしく訓練する」という意味でよく使われ、「しごき」という名詞形も派生しており、この意味は広く知られている。ところで、その意味を生じるものになっている、「(一方の手でにぎり、他方の)手で、強くこするようにして手前に引く」という、手の動作をあらわす「しごく」は、現在(ことに若い層では)あまり使われなくなっているのではない。その意味もあいまい化し、「こする」程度の意味把握をしている人もいるようだ。このような情況は、訓練の意味の「しごく」が、比喩的な転義であることの意識をうすれさせ、弱めていく要因、いわば「遠心力」としてはたらいっているのではない。

一つの多義語の中の二つの意味が、お互いにかかはなれた、似ても似つかないような対象をさし示すことになるばあいは、いくらかもある。たとえば、「ねばる」の

あめが口の中でとけてねばったが、もうさっぱりした。

のような粘着の意味の基本義と、

ファウルを打ってねばったが、とうとう三振してしまった。

のような「根気よく続ける」という意味とは、その言及している領域については、物質のありさまと、人間の行為の持続についてのようすという、非常にちがった方面のことである。このことは、二つの意味が別々のものであると意識されて、つながりが失われていく方向に、いわば「遠心力」として働くだろう。他の多くの多義語に

についても、似たような事情があるとみられる。

ところが、他方では、この二つの意味は、依然として「ネバル」という同じ形を保っており、語形の上では何の相異をも生じていない、ということも事実である。一般に、「形がちがえば、意味もちがう」ということが、ことばについての大原則とされている。逆に、「形が同じならば、意味も同じだ」ということは、同音異義語（たとえば、空の「クモ」と虫の「クモ」というものがかなり存在することから、言えないことは明らかである。しかし、「形が同じなのだから、意味においても、なんらかの関係、つながりのある可能性があるのではないか」という意識が働く、という側面もあるのではないかと考える。語の形と意味とに、対応を求め合う意識が働くのではないか、ということである。たとえば、「喫茶店でねばる」というのは、長く居続けて席を立たないような行動であるのに対して、「チューインガムがねばる」というのは、歯などに付いて離れないことであるのは、語形が偶然同じであるにすぎないのではなくて、意味の上でも何か一脈通うところがあるのではないか、というふうに意識されてくるということである。こういう心のはたらきが、もし存在するならば、それは、多義語における複数の意味の間のつながりを保つ「求心力」としてはたらいっていることになる。

いま、「形」と呼んだのは、「はなしことば」における「音声形式」のことだった。「かきことば」における、文字で書かれた形、「表記形式」も、ことばの「形」の一種であり、とりわけ、日本語では漢字のはたらきが大きいので、「音声形式」だけでなく「表記形式」も加わってはじめて「意味」が十分に支えられていることも少なくない。

当面の問題についても、漢字による、「表記形式」が同じであるか違うか、ということが、二つの意味の関係を密接なものと感じるか、離れたものと感じるか、という意識に影響を与えることがあると思われる。

たとえば、「約束をやぶる」「規則をやぶる」などの「やぶる」は、「まもるべきことに反することをする」という意味のいちばん普通な言い方になっており、「紙をやぶる」「服をやぶる」のような即物的な意味からはかなり独立的になっているとみられる。しかし、両方の意味が、いずれも「破る」という同じ漢字で表記されることが多い、という事実は、転義を多少なり基本義にひきよせて意識させる方向に作用しているのではないかと思われる。

〔注〕

(1) 中島文雄『意味論—文法の原理—』(昭一四 研究社)の「五、言語形式と意味」

(2) 林大「語彙」(講座現代国語学Ⅱ ことばの体系 昭三二 筑摩書房)

(3) 國廣哲彌『意味論の方法』(昭五七 大修館書店)の一〇八頁

(4) 注3の本の一〇四—一〇五頁

(小稿は、昭和六一年七月五日の大妻大学国文学会で口頭発表した内容と大体同じものである。五つの段階のそれぞれについて、語例や例文をふやしたいと思っていたが、身辺にとりこみが続いて果たせなかった。)

単語の意味について 次の質問に気楽に答えてください。正解とか誤答とかいうことは、まったくくない内容のものです。

単語の意味について、次の質問に答ええてください。正解とか誤答とかいうことは、まったく内容のものです。

(1)「意味にあづける、二つずつの例文の、——をつけた動詞(または形容詞)」の意味は、——をつけた動詞(または形容詞)の意味と、どんな関係にあるとあなたは意識しますか。ご自分の感じのままだに、答ええてください。(次の選択肢①～④のどれか一つを選ぶか、それらに自分の感じの当てはまるものがなければ、⑤「その他」として、自由に書いてください。)語がどういう漢字で書かれるか、ということにはとらわれずに、語そのものについての感じによって答ええてください。

歴史的にみれば、——は——から派生したものであろうが、現在の普通の意識ではまったく別々になっている。

は――とは別の意味だけれども、何となく多少のつながりは感じられる

の意味は、
の意味と密接に關係している
の意味は、
の意味と別のものではない。

その他

()内はパーセントを示す

— 93 —

(22)	(21)	(20)	(19)	(18)	(17)	(16)	(15)	(14)	(13)	(12)	(11)	(10)	(9)	
こどもたちがきいらいい声をはり上げています。 いちめんにきいらいいのはながひろがっている。	あの人はこの辺の地理にあかるい。 街燈があるのでこの辺は夜中でもあかるい。	地主の態度がけわしくなった。 山道はますますけわしくなった。	世界の平和の前途はけわしい。 あの山ののぼり道はけわしい。	急に色気がこぼれてきた。 ビールがこぼれてテーブルクロスをぬらした。	詩想がかれて、作品が書けなくなった。 井戸がかれて、水が出なくなりました。	少し飲んだだけで人にからむくせがある。 つたが木にからむ。	英文学をかじったことがあります。 かたいパンをかじった。	舞台の熱演に観客はしびれていた。 たたみの上にすわって足がすっかりしびれていた。	盗難のあったことを役所にとどけた。 荷物を送り先の家にとどけた。	魚をかぎにひっかけてきた。 魚をかぎにひっかける。	授業料を学校におさめる。 家宝のちゃんわんを箱におさめる。	思いがけない感動が身内にわいてきた。 地中から清らかな水がわいてくる。	試験におちて浪人している。 がけからおちてけがをした。	
29 (53)	18 (33)	6 (11)	0	14 (25)	3 (5)	2 (4)	15 (27)	9 (16)	3 (5)	38 (69)	14 (25)	3 (5)	9 (16)	(イ)
16 (29)	23 (42)	8 (15)	3 (5)	12 (22)	10 (18)	12 (22)	18 (33)	18 (33)	7 (13)	9 (16)	5 (9)	11 (20)	6 (11)	(ロ)
5 (9)	12 (22)	26 (47)	9 (16)	16 (29)	16 (29)	15 (27)	12 (22)	14 (25)	10 (18)	5 (9)	10 (18)	7 (13)	16 (29)	(ハ)
4 (7)	2 (4)	6 (11)	27 (49)	7 (13)	16 (29)	16 (29)	7 (13)	4 (7)	19 (35)	1 (2)	12 (22)	24 (44)	13 (24)	(ニ)
1 (2)	0	9 (16)	16 (29)	5 (9)	9 (16)	10 (18)	3 (5)	10 (18)	16 (29)	2 (4)	14 (25)	10 (18)	11 (20)	(ヒ)
0	0	0	0	1	1 (2)	0	0	0	0	0	0	0	0	(フ)